

都市形成過程と地域イメージからみる盛岡市中心市街地の地域らしさ

萩原, 隆太 / HAGIWARA, Ryuta

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院デザイン工学研究科

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編 / Bulletin of graduate studies.
Art and Technology

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

8

(発行年 / Year)

2023-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030261>

都市形成過程と地域イメージからみる 盛岡市中心市街地の地域らしさ

LOCAL IDENTITY OF CENTRAL MORIOKA
DUE TO THE CITY DEVELOPMENT PROCESS AND THE RESIDENT'S REGIONAL IMAGE

萩原 隆太

Ryuta HAGIWARA

主査 福井恒明 副査 高見公雄

法政大学大学院デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻修士課程

The purpose of this study is to clarify the urban structure that constitutes the local identity of central Morioka, based on the relationship between the city development process and the resident's regional image. The results of the literature and map survey and questionnaire survey revealed that areas with a sense of liveliness and historicity within the region are formed with strong cohesion, and that the cohesion and functions have an urban structure that has been maintained since the postwar period.

Key Words : Local identity, City development process, Resident's regional image

1. はじめに

(1) 研究背景

近年、地域の固有性・多様性を生かした地域づくりが求められてきている。国土のグランドデザイン 2050¹⁾では、「各地域が主体性を確立し、固有性を深め、多様性を再構築すること」が理念の一つとして掲げられている。この固有性や多様性を説明する言葉として「地域らしさ」がある。地域らしさは、「場所のアイデンティティ」に関連したキーワードであり、木下ら²⁾の「ローカル・アイデンティティ (Local Identity)」と意味合いが合致する。ローカル・アイデンティティは、「物理的な構造 (physical makeup)」を強調するケースから、「社会的な活動 (social activities)」を強調するケースまで多岐に渡る³⁾とされ、同時に地域に対する認識 (地域イメージ) の把握が求められている。

これに加えて、都市整備の方針を定めるにあたっては、都市構造をどのように認識しているのか (地域イメージ) を把握することが基礎的要件であるとする指摘も見られる⁴⁾。このように、今後「地域らしさ」を生かした都市整備を進めるためには、地域住民が都市の物理的な構造である「都市構造」に対して抱く地域イメージを把握する必要があると考える。

都市構造に特徴の見られる都市の事例として、近世城下町を基盤とした地方都市が挙げられる。近世期の城下町は、自然風土との応答や周辺のランドマークへの眺望など、各都市固有の計画意図により、多様な形態が生み出された⁵⁾。その後の都市形成は、近世期の基本的な骨格を

維持し、その基盤に規定されながら街路整備や都市計画事業により新しい骨格を重ねていく形で進められた⁶⁾。ただし都市構造は、城下町の形態や以降の形成過程で地域差も見られ⁷⁾、構造が不明瞭となるケースも存在する。よって、近世城下町を基盤とする地方都市の都市構造の把握に向けては、この整備年代の違いによる空間的特徴と、形成過程を丁寧に読み解くことが重要となっている。本研究で対象とする盛岡市中心市街地は、盛岡城とその城下町を基盤とする地方都市である。現在官公庁施設の老朽化や商業面で更なる魅力創出が課題となっている⁸⁾。その課題解決に向けた事業では盛岡の「地域らしさ」を軸とした再整備が都市整備の関係者の間で希求されているが、盛岡の都市構造や、地域に対する地域イメージについて、地域住民と共有できる形で示されていない。これは、都市構造の不明瞭さに起因するものである可能性がある。

本研究が対象とする盛岡市中心市街地は、近世由来の基盤を残した都市形成過程を経て、中心市街地全体での地域イメージが読み取りづらいとの指摘がある。盛岡の都市構造の特徴や地域イメージを把握することは、「地域らしさ」を活かした今後の都市整備方針を定める上で重要な知見になると考える。

(2) 研究目的

本研究では、盛岡市中心市街地の地域らしさを都市構造と地域イメージの関係性から明らかにすることを目的とする。

(3) 研究方法

本研究では、城下町由来の地方都市である盛岡市中心市街地の都市構造の特徴から「地域らしさ」を論じるべく、文献・地図調査による都市形成過程の空間的特徴の分析、アンケート調査による地域イメージ分析、そして双方の結果を踏まえた都市構造と地域イメージの関係に見られる空間的特徴の分析を行った。

(4) 既往研究と本研究の位置づけ

城下町を基盤とした地方都市に関する研究のうち、都市構造に着目した研究には、中心市街地における都市構造の実態を官公庁施設・鉄道駅・それらと城郭の位置関係から明らかにした研究⁹⁾や、近世以降の水空間の変遷を明らかにした研究¹⁰⁾がある。近代以降の都市形成過程と人口変動に着目し、その関係性を明らかにした研究¹¹⁾や、地価データを用いて中心市街地の賑やかさとその要因を明らかにした研究¹²⁾も見られる。上記の研究より、都市形成過程や地域の構成要素から都市構造を把握する有用性は示されている一方で、地域住民の認識との関連から計画論への展開を示唆した研究は見られない。

また地域イメージに関する研究の中でも、地域イメージを空間上に可視化した研究には、対象地への来街者の行動圏域や選好理由に着目し、経験と地域イメージとの関係を明らかにした研究¹³⁾や、地域への愛着について「大切な場所」から、地域イメージやアイデンティティを明らかにした研究¹⁴⁾など蓄積がある。そして、地域への愛着や選好と個人の経験や行動には関係があるとされ、これらは地域イメージに影響を及ぼすことが明らかとなっている。上記の研究を踏まえ、個人の活動範囲やエリアに感じる印象を空間上に可視化することは、都市構造と地域イメージの関係を論じる上で重要な視点であると考えられる。

よって本研究では、地域らしさを捉える際に都市構造と地域イメージの関係性を取り上げる点で新規性があると考え、これらを空間上に可視化することを課題とする。

2. 都市形成過程と都市構造

(1) 対象地の概要：岩手県盛岡市中心市街地

盛岡市は岩手県の中央部に位置しており、中心市街地は北上川・中津川・雫石川の合流地点にある。盛岡城（現盛岡城跡公園）の築城された場所は花崗岩の丘陵地である一方で、その周囲は氾濫平野や旧河道となっており、3河川によって形成された河岸段丘上にある。近世期に盛岡城が築城された際は、河川や周囲の山々といった自然地形を活かして城下町が形成された。その後、明治期以降の近代化において、人口拡大を前提とした軸上都心の都市計画によって南西方向に市街地が拡大した。現代では、「コンパクト＋ネットワーク」の考えに基づいて、既成市街地の更新が検討されている¹⁵⁾（図1）。

(2) 盛岡市中心市街地の都市形成過程

本節では、文献・地図調査により盛岡市中心市街地の都市形成の過程を整理し、都市構造の特徴を把握する。調査



図1 盛岡市中心市街地と軸上都心

表1 使用した主な文献資料

No	著者：文献・資料名称	発行年
1	盛岡市史編纂委員会：盛岡市史（第1～21分冊）	1950-1981
2	細井計，伊藤博幸，菅野文夫，鈴木宏：岩手県の歴史	1999
3	森嘉兵衛：岩手近代百年史	1974
4	盛岡市庶務部企画調査課 東北開発研究所：盛岡の歩み 市制施行80周年記念	1970
5	独立行政法人都市再生機構 岩手・秋田開発事務所：盛南開発への道-盛岡新都市区画整理事業 事業誌-	2014
6	佐藤優：脈々盛岡の街づくり	1984
7	岩手県教育会：岩手県史	1980
8	長江好道，藤原隆男，早坂啓造，三浦黎明，浦田敬三，渡辺基：岩手県の百年 県民百年史3	1955

に使用した主な文献資料を表1に示す。

a) 近世期

盛岡の都市形成は、盛岡城の築城から始まる。盛岡城は、文禄元（1592）年に秀吉から築城の許可を受け、寛永12（1635）年に築城され、その周囲に城下町が形成された（図2）¹⁷⁾。盛岡城の西に流れる北上川は内堀として機能していたが、大洪水のたびに被害が発生していたために、延宝元-3（1673-1675）年に北上川を直線にする流路変更工事が行われた¹⁸⁾。

b) 明治から戦前期

明治から戦前までの主な都市整備事業を図3に示す。明治22（1890）年の東北本線の開通に伴う盛岡駅の開業以降、既成市街地とは異なる土地へ都市整備が行われることとなった。この盛岡駅は既成市街地から北上川を挟んで離れた土地に鉄道駅が整備されたため、急遽開運橋の架橋（明治22（1890）年）や官公庁街とを結ぶ大通りの形成が進められ、これが盛岡の基本路線となった¹⁹⁾。また国の直隸となった盛岡城は、失業者対策事業で工事

に着手、明治 39 (1906) 年に岩手公園 (現盛岡城跡公園) として開園した²⁰⁾。

大通・菜園地区についてみていく。大通地区は、藩政期の北上川の河道変更によって生まれた広大な土地であり、大正末期に至っても大部分が田畑だった。一方の菜園地区は、明治 32 (1899) 年に県立盛岡農学校を創立して、周辺が実習地として利用されていた。昭和 2 (1927) 年、この土地の埋め立ておよび経営を行うため、南部土地株式会社が設立された。昭和 3 (1928) 年から、両地区一体的に区画が定められ、商店街を発展させるとともに、周辺一体を住宅地として分譲された²¹⁾。



図 2 近世盛岡城と城下町 (参考文献 16 に筆者加筆)



図 3 明治戦前期の形成過程 (参考文献 19 に筆者加筆)



図 4 戦後期の形成過程 (参考文献 22 に筆者加筆)

c) 戦後期

戦後期の主な都市整備事業を図 4 に示す。第二次世界大戦により盛岡駅前地区が空襲の被害を受け、戦災区域に指定される。その後、昭和 21 (1946) 年に戦災復興区画整理事業が施工され、駅前地区の戦災復興が進んだ²³⁾。

またこの当時、盛岡城跡公園に隣接した櫻山神社は境内が更生市場となり、これが年々膨張して飽和状態に至ったため、引揚者対策の一環として政治的解決を迫られていた。そのため、昭和 25 (1950) 年に中ノ橋大通線が事業認可され、昭和 26 (1951) 年に棧橋式店舗 (東大通商店街) の建設が可決された²⁴⁾。昭和 29 (1954) 年度にこの中ノ橋大通線が全線開通することとなる。

内丸地区では、官公庁施設を計画的に集中する必要があるとして「一団地官公庁施設計画」が策定され、計画決定され (昭和 32 (1957) 年)、昭和 44 (1969) 年までにほぼ完了した²⁵⁾。

1960 年前後からは、街路整備が進み、土地区画整理事業や新設道路の整備や拡幅が行われた。仁王地区では、街路が旧城下町の形態であったため、幅員が狭小で不規則であり、建築物が稠密に乱立していた。これを受け、仁王地区都市区画整理事業が着工 (昭和 34 (1959) 年) され、昭和 53 (1978) 年度に完成した²⁶⁾。さらに、盛岡バスセンターが昭和 35 (1960) に開業するとともに、中ノ橋通も昭和 42 (1967) 年度までに完成し、都市間移動の拠点である盛岡駅から都市内移動の拠点である盛岡バスセンターとが 1 本の路線で繋がった²⁷⁾。大通商店街では、防災建築街区造成法の制定を受け、昭和 44 (1969) 年に防災建築街区造成事業が開始されている²⁸⁾。

その後、岩手国体の開催 (昭和 45 (1970) 年) や東北新幹線の開通 (昭和 57 (1982) 年) に向けて、既成市街地が更新された。盛岡駅前北地区では、土地区画整理事業が実施された (昭和 54 (1979) 年)。

(3) 盛岡市中心市街地の都市構造

盛岡市中心市街地の都市構造について分析を行う。初めて市街化された「都市形成時期」と、その後の面的・線的な都市整備により更新された「都市整備時期」を図 5 に示す。都市形成時期およびその後の都市整備時期がエリア毎に異なっており、近代以降パッチワーク的に都市整備が実施されてきたことが読み取れる。また近世以降大きな都市整備が実施されず、当時の町割りを残すエリアがあることや、昭和後期に初めて都市形成が行われたエリアがあることも確認できる。そして地域内の商業地区は、近世由来の「中津川東側地区」、明治期の鉄道駅開業により生まれた「盛岡駅前地区」、昭和に入り整備が進められた「大通商店街地区」の 3 エリアが中心となっている。これらのエリアは戦前までに都市形成が行われ、戦後以降もその範囲を拡大しながら地域の賑わい創出に寄与し続けていると言える。このように、時代に応じて商業地区の中心が移り変わりながらも、現在まで商業地区として成立している都市構造を有している。

(回収率 15.6%) の回答が得られた。

$$n \geq \frac{N}{\left(\frac{e}{k}\right)^2 \frac{N-1}{P(1-P)} + 1}$$

n:必要回答数, N:母集団の大きさ (世帯数 N=7,582),
e:標本誤差の許容水準 (e=5%), k:信頼度に対応する正規分布点 (信頼度 95% (k=1.96)) P:予想される母集団の比率 (P=0.5)

b) 各エリアにおけるイメージ範囲の特徴

各エリアにおけるイメージ範囲の特徴を分析する。まず、「盛岡を代表する 5 地点それぞれと同様のイメージ範囲を囲んでもらう (圏域図示法)」質問項目の調査結果は、次の手順により地図表現を行った。①回答結果を ArcGIS pro のジオリファレンス機能を用いて、位置情報を付加する。②各地点 (地点 A~地点 E) と同様のイメージ範囲をそれぞれトレースする。③30m×30m のメッシュに当てはめ、回答重複率に応じて色の濃淡を 7 段階に変化させて表現する。

さらに大内ら³⁰⁾に倣い、エリア内の特徴的な要素を「点的要素」「線的要素」「面的要素」「時間変動要素」に分類し、回答率が 5%を超える項目をプロットした (図 7)。

地点 A (盛岡駅前) と同様のエリアイメージは、駅周辺施設や水辺に見られる要素が特徴的である。またイメージ範囲は、主に北上川と鉄道路線に挟まれた範囲となっており、駅前商店街を軸に南北方向へ広がっている。

地点 B (材木町通り) と同様のエリアイメージは、材木町や材木町商店街を中心に、比較的小さな範囲でエリアイメージが形成されている。商店街に対して抱く街並みの特徴や、よ市のイベントが開催される範囲がイメージ範囲に表れている。

地点 C (大通商店街) と同様のエリアイメージは、大通商店街や映画館通りを中心に賑やかさのある商業地区として認識されている。イメージ範囲の端には、商業施設が位置しており、賑わい創出に寄与する要素が含まれる形となっている。

地点 D (岩手県庁前) と同様のエリアイメージは、官公庁施設や歴史的な施設や資源を中心に構成され、歴史的・業務的な印象を抱かれている。エリアイメージの範囲は、官公庁施設が集積する中央通り沿いと歴史的な要素である櫻山神社と盛岡城跡公園が含まれる範囲となり、境界部分には中津川があると読み取れる。

地点 E (岩手銀行赤レンガ館) と同様のエリアイメージは、肴町商店街の賑わいや、寺社や街並みの歴史性、中津川や盛岡城跡公園の自然、住宅街の静かさなど多数の要素により構成されている。イメージ範囲は他エリアと比べて最も広がっていることも特徴に挙げられる。

(3) 各エリアに対する印象や活動内容の特徴

エリアに対する印象や活動内容から 5 エリアを分類す

る。各エリアに対する印象やエリア内での回答率の高かった活動内容を図 8 に示す。印象項目のうち最も回答率の高かった項目に着目すると、地点 A・地点 C では「賑やか」、地点 B・地点 D・地点 E では「歴史的」が最も高くなっていることを確認できた。さらに、「歴史的」が高くなっている 3 エリアでの活動内容に着目すると、3 エリアともに「散歩」の割合が高くなっている一方で、地点 B では「ショッピング」「イベント」、地点 E では「日常的な買物」「食事」「ショッピング」など、商業地区での活動内容が特徴的となっている。よって、地点 B・地点 E では歴史を感じられるだけでなく、賑わいを感じられるエリアであると言える。このように、エリアイメージは「賑やかさ」と「歴史性」により説明され、地点 A・地点 C・地点 E では「賑やかさ」が、地点 B・地点 D・地点 E では「歴史性」を感じられることがわかった。

(4) 盛岡市中心市街地に対する地域イメージ

各エリアのイメージ範囲と自然地形との関係について図 9 に示す。イメージ範囲は、5 エリアそれぞれの回答重複率 30%を超える範囲を重ね合わせている。まずイメージ範囲の分布から、プレアンケート調査で得られた結果同様、各イメージ範囲が概ね重複せず、それぞれが独立して形成されていることが読み取れた。ゆえに、各エリアは独自のエリアイメージを形成していると考えられる。また、イメージ範囲の境界部分に着目すると、特徴的な自然地形と一致していることも確認できた。地点 A と地点 B と同様のイメージ範囲の境界には北上川、地点 C と地点 D には盛岡城跡公園の段丘崖、地点 D と地点 E には中津川が位置している。

表 3 本アンケート調査の質問項目

■ 基本属性/居住年数・来街頻度
○ 年齢・性別 ○ 居住年数 ○ 職業 (選択式)
■ 地域内のイメージ範囲や特徴的な要素
○ 盛岡を代表する 5 地点と同様のイメージ範囲を記入 (圏域図示法)
■ 各エリアでの活動や印象
○ 来街頻度 ○ 活動内容 ○ 印象 (選択式)
○ エリア内の特徴的な要素 (自由記述)

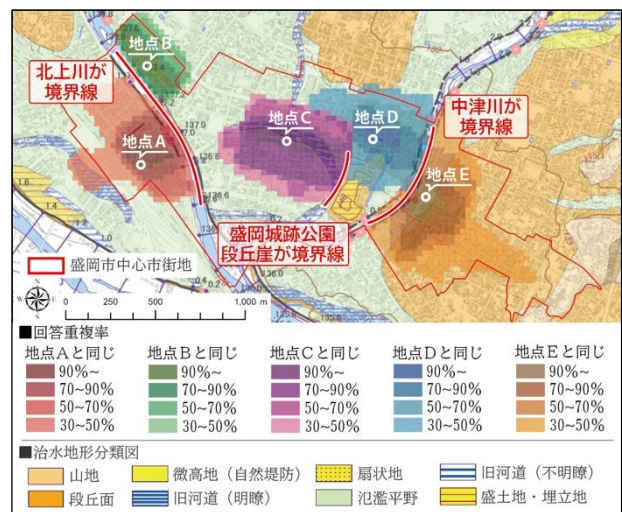


図 9 5 地点と同様のエリアイメージの範囲と自然地形の関係 (参考文献 31 に筆者加筆)

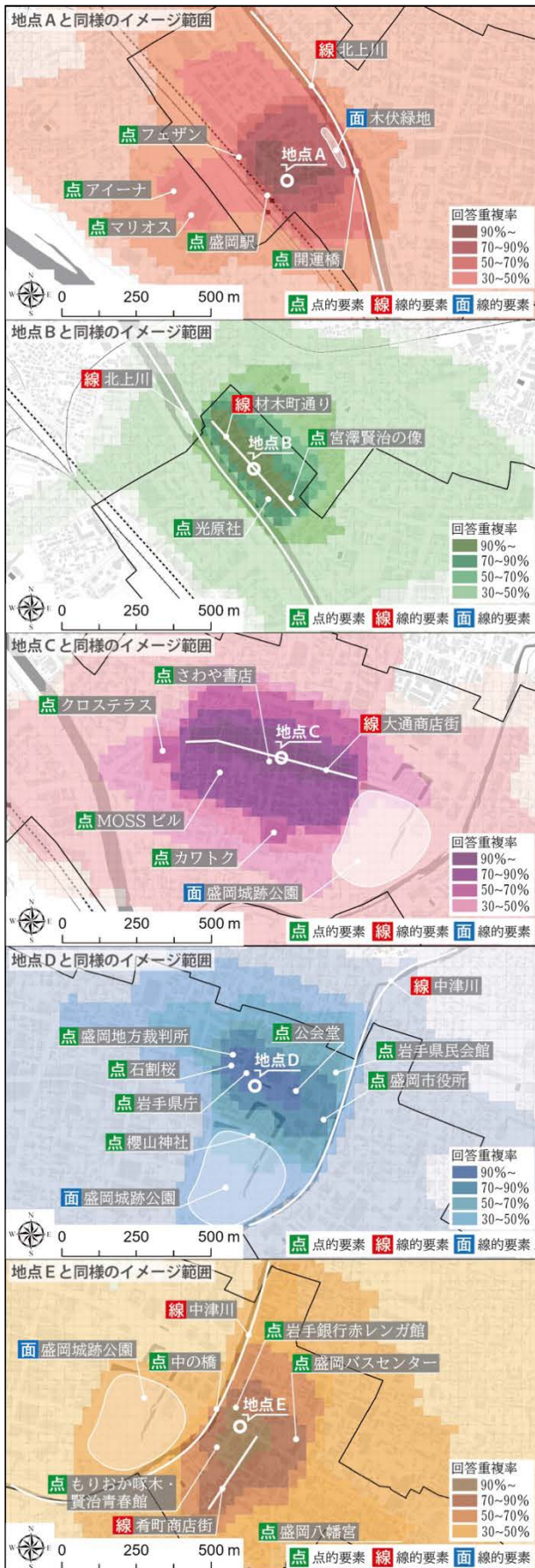


図7 各エリアのイメージ範囲と特徴的な要素

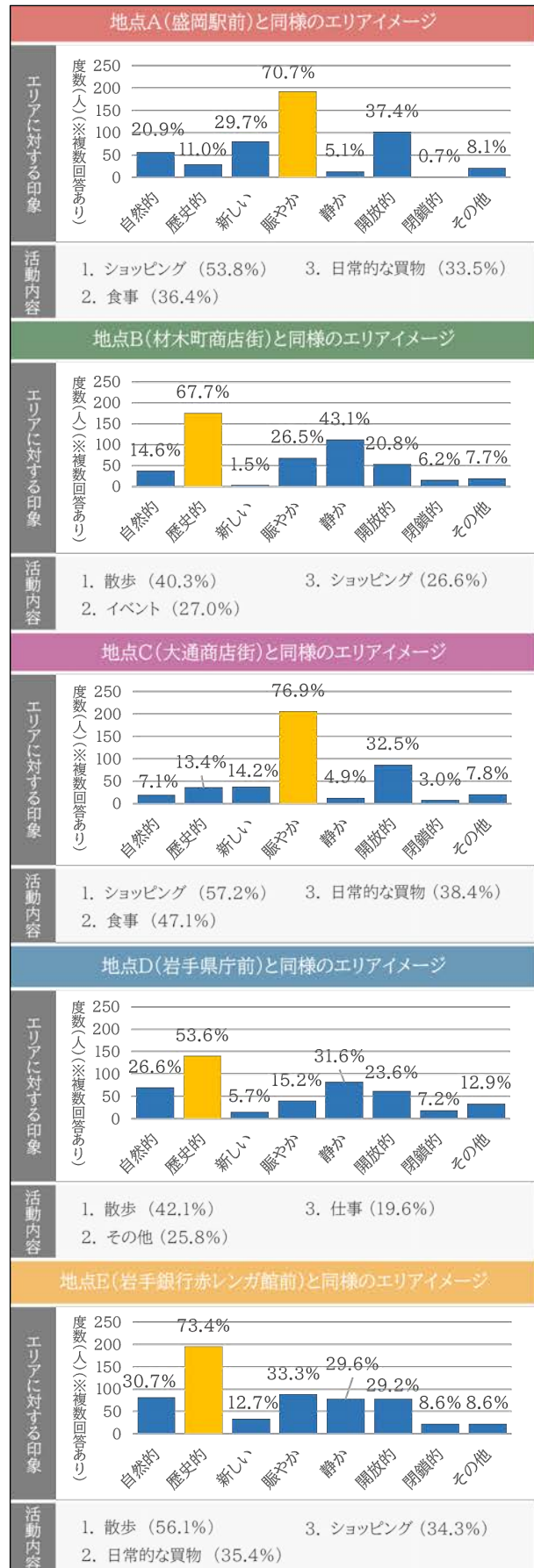


図8 エリアに対する印象やエリア内での活動内容

4. 都市構造と地域イメージの関係性

(1) 各エリアが独自のイメージを形成する要因

各エリアが独自のイメージを形成し、中心市街地全体での地域イメージが読み取りづらい要因について考察する。地域イメージ調査結果より各エリアの回答重複率30%を超えるイメージ範囲と各エリアが独自のイメージを形成する要因について図10に示す。

まず、北上川や中津川、盛岡城跡公園の段丘崖といった自然地形の存在は、各エリアのイメージ範囲を規定する要素になると考える。また岩手県庁のある内丸地区のイメージ範囲は、集積する官公庁施設だけでなく、公会堂や歴史的資源も残っていることから、近世由来の櫻山神社や盛岡城跡公園も含まれる形となっている。こうした歴史的価値を有する業務地区として一体的にエリアイメージが形成されていると考えられる。

次に都市形成過程に着目する。近代以降の面的な都市整備によりエリア単位で商業や業務などの機能が付加されていったことも要因の1つであると考えられる。盛岡駅前地区は明治期の鉄道駅開業以降、玄関口としての機能が付加され、土地区画整理事業や再開発事業、地区計画など多くの面的整備が実施された。大通・菜園地区は両地区一体的な面的整備により誕生し、その後も開発された地区単位で賑わい創出が図られたと推察される。このように、近代以降、面的整備を伴って各エリアに機能が付加され、現在まで変わらず維持されているという都市形成過程の特徴がある。

加えて、都市形成過程で明確な軸が形成されなかったことも要因として考えられる。近代以降の街路整備は、盛

岡駅の開業を契機に既成市街地と新市街地を結ぶべく実施されてきたが、主要街路は同時期に整備されず時代ごとの合理的な判断に基づいて、既にある街路に接続する形で整備されてきたと考えられる。そのため、街路整備年代は地点ごとに異なっており、いびつな形で接続されている地点も確認できる。そして、こうした街路整備により現代の拠点同士を結ぶ街路は形成されたものの、地域内で明確な軸が存在せず、中心市街地全体での都市構造の不明瞭さを生んでいると推察される。

(2) 盛岡市中心市街地の地域らしさ

盛岡市中心市街地の地域らしさについて、都市構造の観点から考察する。盛岡市中心市街地の地域らしさは、「①地域内にある複数のエリアがそれぞれ独立してイメージを形成する都市構造を有していること」「②地域内に明確な軸が存在しない都市構造を有していること」であると考えられる。各エリアのイメージ範囲を規定および強調する要素として、自然地形の存在や、歴史的な施設・資源の特定エリアへの集中、近代以降の新市街地開発が面的整備を伴って既成市街地と異なる場所に形成された都市形成過程、近代以降の都市整備による不明瞭な軸が挙げられる。その結果、エリア単位でのイメージは捉えやすい一方で、中心市街地全体での地域イメージが捉えづらい都市構造となっていると考えられる。

さらに、エリアそれぞれのイメージやエリアが担う機能は、戦後以降大きく変わっていないと考える。ただし戦後以降も各エリア内で市街地の更新は行われており、近年でも新たに点的・線的な都市整備が実施されている。そのためエリア内部での中心地は、時代とともに変化して



図10 各エリアの回答重複率30%を超えるイメージ範囲と各エリアが独自のイメージを形成される要因

いる。しかし、エリアとして担ってきた機能(賑わい・歴史)は失われることなく維持されていると考える。

以上より、このような地域らしさを持つ盛岡市中心市街地は、広域的に地域の特徴を捉えることが難しい都市構造であると推察される。一方で、明確なイメージが形成されたエリアは複数存在する。加えて、各エリアを結ぶ明確な軸がないことは、街並みや風景に対して変化を生んでいると言い換えられる。したがって盛岡市中心市街地は、豊かな自然や賑わいのある商店街、古くからの業務地区、歴史的な街並みや資源を連続的に体感できるという魅力的な都市構造を有していると考えられる。

5. 結論と今後の課題

(1) 結論

本研究では、盛岡市中心市街地の都市構造の特徴や地域住民が抱く地域イメージを把握した。そして、盛岡市中心市街地の地域らしさは、「地域内にある複数のエリアがそれぞれ独立してイメージを形成する都市構造を有していること」「地域内に明確な軸が存在しない都市構造を有していること」であると明らかにした。

(2) 今後の課題

多様性・固有性の活かした整備に向け、物理的な構造だけでなく社会的な活動などソフト面での取り組みから地域らしさを解釈すること。また、他の城下町由来の地方都市との比較研究により、都市構造の特徴把握の方法論を確立すること。

謝辞: 本研究のプレアンケート調査および本アンケート用紙の配布にあたり、盛岡市役所都市整備部の滝村敏道様には多大なご支援とご協力を賜った。心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 国土交通省：国土のグランドデザイン 2050～対流促進型国土の形成～，2014。
- 2) 木下勇，ハンスビンダー：日本の都市再開発におけるアイデンティティと持続可能性について，都市計画論文集，Vol.46，No.3，pp.463-468，2011。
- 3) Yuhan Shao, Binyi Liu：Local Identity Regeneration of Unused Urban Spaces, International Review for Spatial Planning and Sustainable Development, Vol.6, No.4, pp.21-34, 2018。
- 4) 長瀬恵一郎，松本昌子：認知地図を用いた都市構造に関する意識分析，都市計画論文集，Vol.27，pp.493-498，1992。
- 5) 佐藤滋：城下町の近代都市づくり，鹿島出版会，1995。
- 6) 佐藤滋：都心交通を支える骨格形態とまちの再生，国際交通安全学会誌，Vol.24，No.4，pp.230-239，1999。
- 7) 鶴添博士，佐藤滋：近世城下町を基盤とする地方都市の都市構造と人口変動との関連性，都市計画論文集，

Vol.33，pp.385-390，1998。

- 8) 盛岡市：中心市街地活性化 つながるまちづくりプラン，2021，
https://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/022/624/plan_R3kai.pdf，[最終閲覧日：2022.08.27]。
- 9) 宋基伯，佐藤滋：地方中心・中小都市における中心市街地骨格構造との関連でみた中心市街地活性化事業の集積特性に関する研究，Vol.81，No.729，pp.2431-2441，2016。
- 10) 松浦茂樹，島谷幸宏：我国城下町都市における水空間とその変遷，水利科学，Vol.30，No.1，pp.17-37，1986。
- 11) 鶴添博士，佐藤滋：近世城下町を基盤とする地方都市の都市構造と人口変動との関連性，都市計画論文集，Vol.33，pp.385-390，1998。
- 12) 対馬銀河，吉川徹，讃岐亮：駅との位置関係からみた地方都市中心市街地のにぎやかさを分析する手法の開発と適用，日本建築学会技術報告集，Vol.23，No.54，pp.667-670，2017。
- 13) 宇佐美卓，杉田早苗，土肥真人：来街者行動圏域と空間の選好から見た街の魅力の構造に関する研究，ランドスケープ研究，Vol.63，No.5，pp.809-814，1999。
- 14) 木場佳音，杉田早苗，土肥真人：個人の大切な場所が織りなすまちの構造の研究 大岡山・千束地区を対象として，都市計画論文集，Vol.56，No.3，pp.975-982，2021。
- 15) 盛岡市土木部都市計画課：岩手県の都市計画 1996 人にやさしいまちづくりをめざして，1996。
- 16) 川井鶴亭，野原正勝：盛岡城下絵図。
- 17) 盛岡市史編纂委員会：盛岡市史 第三分冊一 近世期上，盛岡市役所，pp.7-8，1956。
- 18) 細井計，伊藤博幸，菅野文夫，鈴木宏：岩手県の歴史，山川出版社，p.14，1999。
- 19) 大日本帝國陸地測量部：盛岡 [1927]，1927。
- 20) 森嘉兵衛：岩手近代百年史，熊谷印刷出版部，pp.249-250，1974。
- 21) 盛岡市庶務部企画調査課 東北開発研究所：盛岡の歩み 市制施行 80 周年記念，盛岡市役所，p.70，1970。
- 22) 国土地理院：盛岡 [2013]，2013。
- 23) 前掲 21，pp.71-74。
- 24) 前掲 21，p.79。
- 25) 前掲 21，pp.80-81。
- 26) 前掲 21，p.83。
- 27) 前掲 21，pp.81-82。
- 28) 前掲 21，p.82。
- 29) 安藤理紗，福島秀哉：石垣島における赤瓦屋根の街並み景観の変容と地域住民による愛着・選好の特徴，土木学会論文集 D1 (景観・デザイン)，Vol.78，No.1，pp.64-83，2022。
- 30) 大内 宏友，砂田 哲正：地域住民における環境認知の構成要素と広がりに関する実証的研究 環境認知の領域を主体とした実態圏域 その 1，日本建築学会計画系論文集，No.465，pp.69-75，1994。
- 31) 国土地理院：治水地形分類図，
<https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/lcmfcH25H26view.html>，[最終閲覧日：2023.02.05]。